

TOPIC

ふくしま国際医療科学センター 中高生見学会開催

令和4年11月3日(木)、ふくしま国際医療科学センターにおいて、中高生見学会を開催しました。

見学会は1時間30分の予定で、先端研究2件とIgA抗体マスク開発等についての紹介、現場で学ぶ災害医療の体験、みらい棟エントランス及び多目的医療用ヘリ格納庫見学と盛りだくさんの内容で行いました。

体験型プログラムに高い関心

終了後のアンケートでは、現場で学ぶ災害医療と多目的医療用ヘリ格納庫見学などの体験型プログラムへの関心が高い結果となりました。

また、先端臨床研究センター研究者プレゼンテーションによる「次世代のがん治療の主流、ラジオセラノスティクス(診断と治療の融合)の実現に向けた本学の取組」「標的アイソトープ治療(TRT)に有用なアルファ放射体とその可能性について」や、医療・産業トランスレーショナルリサーチセンターによる「IgA抗体マスクと抗体医薬研究開発の最前線について」を紹介した座学でも、「時間があればもっと詳



しく知りたい」と高い興味を示しました。

はじめは遠慮がちに本学教員の説明を聞いていた生徒さんたちでしたが、最後の多目的医療用ヘリ格納庫見学でドクターヘリを間近に見た頃には、興奮した面持ちで質問が相次ぐなど盛況のうちに終了しました。

プログラム予定時間を30分ほど超過しての終了となりましたが、「今日の見学会参加が本当に楽しかった」、「もっと詳しく知りたい」

など、大変うれしい意見をいただきました。

科学と医療に触れる機会提供

初めての開催で、改善すべき点もありますが、福島復興を医療と科学の面から支えるふくしま国際医療科学センターとして、今後も次世代を担う人材に、科学と医療に触れる機会を積極的に提供してまいります。

NEWS

新しい時代に求められる看護の本質 —フローレンス・ナイチンゲール看護理論を通して—

令和4年11月24日(木)に、参加者140名を迎えて、福島県看護学会が開催されました。

学会の特別講演に本学看護学部基礎看護学部門黒田み教授が招致され、「新しい時代に求められる看護の本質～フローレンス・ナイチンゲール看護理論を通して～」をテーマに講演しました。

黒田み教授の専門とする看護理論について、また、F.ナイチンゲールの生涯に関する記録や著述からの抜粋をもとに、自身の実体験を

交えて講演は進められました。

印象的であったのは、F.ナイチンゲール89歳の誕生日を祝うNew York Times紙の新聞記事の一節、「The welfare of nurses still has her eager interest. (看護師たちの暮らしぶりが、今でも彼女の強い関心事である)」のくだりです。

また、晩年、F.ナイチンゲールはNursing Science(看護学)ではなく、Nurse(看護師)に関心を持っており、「看護学的发展は、それを担う人材にかかっている」と考えていたという



話を聞き、「病気ではなく病人をみる」と言い続けていたことを思い出しました。常に視線の先は「人」であり、医療は「人」のためにあるものであることを伝えてくれていたかのようです。

「ルワンダの教育を考える会」が伝えてくれたこと

令和4年11月7日に「ルワンダの教育を考える会」主催で、ルワンダに約1か月留学した城西国際大学看護学部の学生の発表を聞く、主に学部学生向け交流会を開催しました。

これは国内外の小学校で参加型健康教育を実施する国際共同研究(19KK0060)の関連で企画されたものです。

当日は城西国際大学から看護学生9人と教員1人、ルワンダの教育を考える会から6人、そして本学から看護学生および卒業生5人、医学生1人、教員他10人が参加しました。

城西国際大学の学生が現地の衣装を身に



まとい体験したことを生き生きと発表し、本学学生からは留学の準備や留学経験の今後の

活かし方などについて多くの質問があり、活発な交流となりました。

国際原子力機関(IAEA)テクニカルミーティングに本学教員が参加

令和4年11月2日(水)~4日(金)にかけて、ベルギーのモルにおいて、国際原子力機関(IAEA)のテクニカルミーティングがハイブリッド開催され、本学からは、医学部健康リスクコミュニケーション学講座田巻倫明教授と、同放射線健康管理学講座アミール偉(いさむ)助教が現地参加しました。

放射線を含む科学的な事実を一般市民に伝える為には

同ミーティングは、国際的な社会において、放射線を含む科学的な事実を一般市民へ伝える、あるいは放射線の懸念に対処する際の研究機関や専門家のベストプラクティスを発表・促進することを目的に開催されたものです。

福島県立医科大学は平成24年からIAEAと

「科学技術と社会(Science, Technology, & Society)」に関するプロジェクトを継続しており、神谷 研二副学長、同臨床検査医学講座志村浩己教授、同放射線健康管理学講座坪倉正治教授、本学総合科学教育研究センター後藤あや教授を含む計6名の教員が演者や座長として本ミーティングに参加しました。

田巻倫明教授は、本学における放射線に関する医学生および専門家の教育について、アミール偉助教は、環境省が進める放射線の健康影響に伴う差別・偏見の払拭を目的とする「ぐるプロジェクト」のインタビュー結果について、それぞれ発表しました。

同ミーティングでは、学会形式の発表の他に、会場であるTabloo(タブロー)の見学ツアー(モルは、ベルギー国内の原子力発電所



子供の被ばくを心配する母親役に、放射線被ばくについて説明する田巻教授

などから排出される放射性廃棄物の最終処分場建設予定地であり、Tablooでは放射線に関する住民向けの展示がある)や、ミーティングをアレンジしたベルギー原子力センター(SCK CEN)の施設見学、また、原子炉からの低レベルの放射性プルームの排出を想定したワークショップなどが開催されました。

告知

パンダハウスを育てる会が「バーチャル美術館」をオープンへ

パンダハウスは、本学附属病院で病と闘う子どもたちとその家族が利用できる滞在施設です。このハウスを運営する認定特定非営利活動法人(NPO)パンダハウスを育てる会は、令和4年12月12日(月)に「バーチャル美術館(病と闘う子どもときょうだいの作品展)」をオープンします。

病と闘っているお子さんとそのごきょうだい制作した作品をインターネット上で自由に鑑賞できます。また、バーチャル空間に再現されたパンダハウス内に作品が展示されるため、作品を楽しみながらハウスの雰囲気も味わうことができます。

「バーチャル美術館」はパンダハウスホーム

ページからどなたでもご入館いただけます。皆様のご来館を心よりお待ちしております。



詳しくは、パンダハウスのホームページをご覧ください



Web site